

「川のあるまち」第27号

四国で亡くなった越ヶ谷の六十六部行者

加藤幸一

(1) 六十六部とは

「六十六部」とは、写経した六十六部の法華経のことである。略して「六部」ともいわれるが、一般には、「六部さん」等と言って、六十六部行者「ぎょうじゃ」(六十六部聖「ひじり」、廻国聖ともいう)のことを指す。

「六十六部廻国」は、遍歴者が、日本全国、北は陸奥国、南は薩摩国の六十六か国を歩き廻って巡礼し、六十六部の写経された法華経を一国一か所、合計六十六か所の霊場にそれぞれ一部ずつ、合計六十六部を納めることである。

鎌倉時代末から室町時代にかけては、僧侶が主に行っていた。江戸時代になると、僧侶の他に一般の人も行うようになったのである。江戸時

六十六部廻国の書き写した法華経(大乘妙典ともいう)の納経先は、その国の国分寺とも一ノ宮とも言われるが、実際には、それ以外の有力寺院や神社が選ばれることもあった。

六十六部廻国は、僧侶の他に一般の人が、鼠木綿の着物を着て、手甲・甲掛・股引・脚絆を付け、笈を背負って、鉦を吊り下げて鳴らし、「ナンマイダ」などと念仏を唱えながら、巡礼姿で諸国を旅するわが国最大の巡礼といえる。

(2) 越谷地域で見られる六十六部廻国塔

「六十六部廻国塔」(六十六部廻国供養塔)は、六十六部廻国巡礼が成就した記念に建立された石塔である。

巡礼先の地で廻国半ばにして亡くなり、その地の人によって、敬意を表して建立された石塔もある。

図1は、宝永五年(一七〇八)に大聖寺「だいしょうじ」(大相模の不動尊)の僧侶のために西方村(にしかたむら)の藤塚と山谷(さんや)の

人々によって建立された石塔で、市内で最古の六十六部廻国塔である。銘文も刻まれ、歴史的に貴重な石塔といえる。

図4は、六十六部廻国を成就した記念に通誉円心によって建立された石塔で、通誉円心は、廻国達成した十二年後にも念仏供養塔を建立するなどして地元で活躍している。

図5の上段の石塔は、増林村(ましばやしむら)の須賀吉兵衛なる者が、この地に訪れた六十六部行者の為に供養して建立したものである。

図8は、そこに刻まれた銘文によると武陽散人の雅号をもつ僧侶円心が、成年(享保三年)の三月より子年(享保五年)の十月までの二年七か月をかけて六十六部廻国を成就しているが、それを記念して、翌月の十一月に増林三五〇〇の平野家(屋号は「げんざむ」)の先祖、平野源左衛門が建立したものである。大松(おおまつ)の平野家(大松一七五)の路傍にある六十六部廻国塔(図6)に刻まれた円心と同一人物であろう。増林の平野家と大松の平野家との親戚としてのかつてのつながりが1推測される。

図15は、相模国三浦郡下宮田村より、この地にやってきた六十六部の女性行者の供養のために建立されたものである。

図23は、野島村(のじまむら)生まれ小曾川村(おそがわむら)育ちの斎藤徳右衛門が、老いてから二度に分け、都合六年もかけて六十六部廻国を成就した記念に建立したものである。

図30は、遠く越後国岩船郡村上領新保村からやってきた六十六部行者によってこの地に建立されたものである。

同じく図32は、越後国蒲原郡出身の江戸浅草の山谷(さんや)に住む六十六部行者によって建立されたものである。

なお、図12や13などの「六十六部供養塔」は、廻国はしないが、法華経六十六部を奉納し供養した記念に建立された石塔である。

ここでは、図版1から32までの、現存している六十六部に関する供養

塔を紹介したが、「越谷市金石資料集」によると、その他にも、現在になつて所在が行方不明となつた六十六部供養塔がある。次のとおりである。(上部の漢数字は、「越谷市金石資料集」の「六十六部」の掲載順の番号)

二・ 正徳元年九月吉日 「奉納大乘妙典六十六部供養塔」

笠付型 大林一七五路傍

四・ 正徳五年十月吉日 「奉読誦大乘妙典一千部成就所」

柱状型 大間野の光福寺 「武蔵国大間野村」

一〇・ 元文四年七月吉日 「奉供養大乘妙典一千部」

笠付型 袋山の釈迦堂

一八・ 安永四年十一月吉日 「奉納供養日本廻国」

駒型 見田方の浄土堂 「当所世話人中、願主覚道」

一九・ 文化八年十一月十五日 「奉納大乘妙典日本廻国供養塔」

駒型 西方堂端共同墓地 「天下泰平・国土安全」

二〇・ 文化八年十一月十五日 「奉納大乘妙典日本廻国供養塔」

自然石 西方十一面観音堂

「江洲加茂郡比留村行者円心、世話人当村庄蔵・和洲宇右衛門」

(3) 四国の巡拝先で亡くなつた越ヶ谷の六十六部行者

ア 四国の戸板島(といたじま)の『六十六部廻国墓地蔵』

これは、高知市の東北東十五キロメートルの地点にある観音堂そばの寛延四年(一七五二)の石仏である。所在地は、土佐山田町戸板島である。観音堂の北側には、四国弘法大師札所巡りの旧お遍路道が東西に走っている。東方の近くには、物部川が流れている。

高知市加賀野井二・二三・一の岡村庄造氏の説明によると次の通り。

「台座銘は向かつて左側の『佐古郷(さこごう)戸板島村』は石塔の現在場所、中村氏は当村代々の庄屋です。現在も末裔が同所に住んでおり、同封写真の内、お堂の後方に写っている家がそうです。」「死亡の『六十六部』行者、七郎兵衛は、遍路コースに当たる戸板島のお堂(昔はもつ

と大きく、寝泊りできたと思われず)を根拠地として、治療や除災(じよさい)、その他祈祷などをして地域の住民に恩恵をもたらしていたでありましょうか。特に人の集まっている後免町(現、南国市後免町)方面へ力を注ぎ、多くの信者を得ていたものと解されます。没後、これ程の石塔を作つてもらえるのはその証しです。」と推定している。

イ 越ヶ谷新町の六十六部行者の七郎兵衛

地蔵菩薩座像の台座には、「寛延(一七五二)四辛未天 六月十四日」

「武州さき玉郡こしかい新町 六十六部七郎兵衛墓 行年五十九 此所

(ここ)にて没」と刻まれている。

越ヶ谷新町の七郎兵衛は、寛延四年六月十四日に、遠いこの地にやつて来てとどまり、地元の為に尽くしたと思われ、六十六部廻国巡礼半ばにしてこの地で果てたのである。

この石塔は、七郎兵衛(戒名は伝心禅定門)の墓を兼ねた六十六部廻国塔である。この石塔を建立した中心人物は、七郎兵衛を慕っていたと思われる地元の戸板島村の庄屋(関東でいう名主)中村勘六や、近くの後免町に住む村上伴五郎と田所や安兵衛の合わせて三人である。

この石塔に刻まれている「こしかい新町七郎兵衛」とは、越ヶ谷宿の新町の代々名乗つてきた会田七郎兵衛家の人物をさすのであろう。

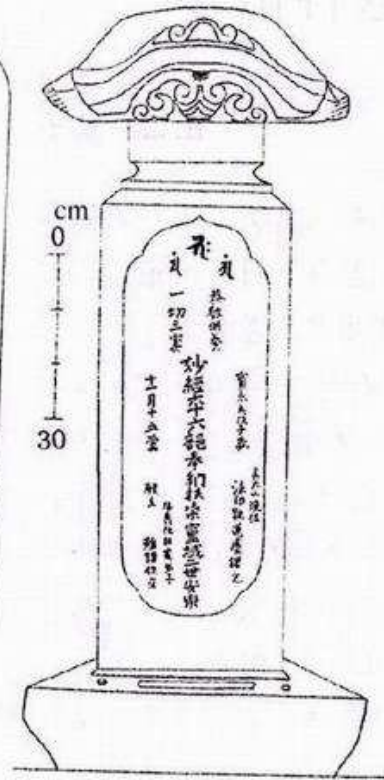
江戸時代の文化・文政年間に作成された「越ヶ谷・瓜の蔓」(福井猷貞著)の中の日光道中に沿つた町並みを紹介した図に「会田七郎兵衛屋敷」との文字が見られるためである。「会田七郎兵衛屋敷 田中安兵衛」と

「会田七郎兵衛屋敷 会田新右衛門・庄蔵」の二か所がそうである。

後者が会田七郎兵衛宅であろうか。会田七郎兵衛は、住まいの新町が越ヶ谷宿のうちでも一番南のはずれにあるので、分家の家柄であつたことは間違いないであろう。すぐそばには、瓦曾根村(かわらぞねむら)がある。

1. 西方
六十六部廻国塔

大聖寺墓地



礼 礼
恭敬供養
妙經六六部奉納扶除靈域三世安樂
十一月十五寅
願主 福壽院祐憲弟子 離讀欽立

寶永五戊子歲
法印觀蓮虔護之
真大山現住

〔裏面〕
當山本堂前立不動明王火炎鋸索石座等
殘壞年已尚矣專信心沙弥離讀乘納經六
十六部之類輪奐募衆緣令修補之且於迦羅
制多迦二童子像新令彫造請余慶讚供
養兼遣石浮圖以欲貽將來其功不徒
施福豈唐捐乎 大聖寺 觀蓮誌

※「扶桑」とは、中国の東方にある日の出る國、日本をさす。
※「助縁」とは、「助援」(援助する)の意のことか。

2. 四糸
六十六部廻国塔

妙音院墓地



3. 平方
六十六部廻国塔

奉納大乘妙典六六部日本回國

富士合成工業そば丁字路

奉納大乘妙典六六部是廻國之善願就
寶永七庚午年
十月三日日
願主 福壽院祐憲弟子 離讀欽立

4. 大松

六十六部廻国塔

平野家〔大松一七五〕路傍



念仏供養塔

平野家〔大松一七五〕路傍

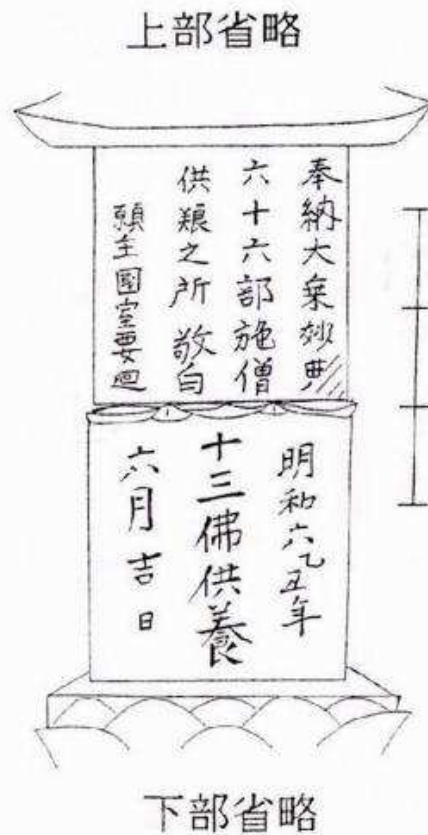


十一月十七日

5. 増林

六十六部及び十三仏供養塔

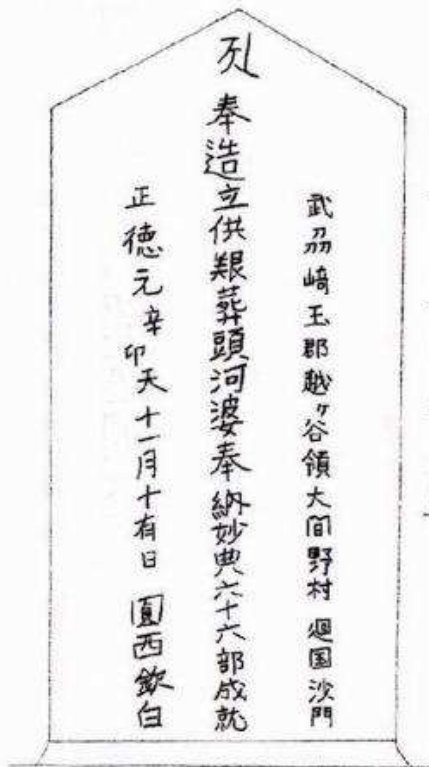
勝林寺



大間野

6. 六十六部廻国塔

光福寺



神明下

7. 六十六部廻国塔

薬師堂

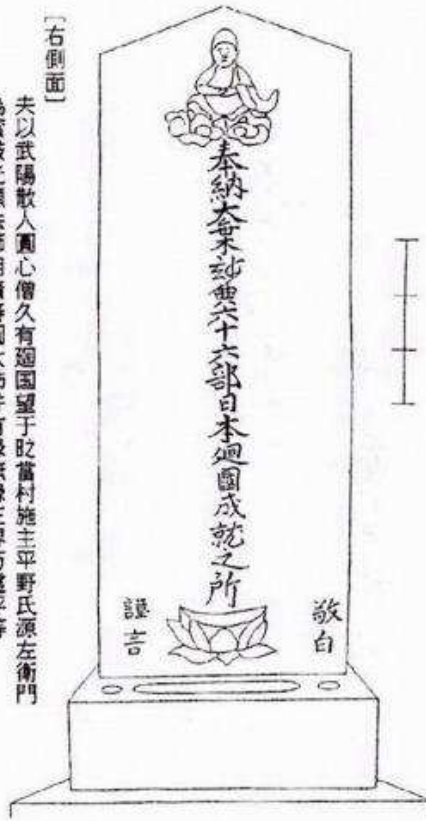


奉供艱大乘妙典六十六部成就處

増林

8. 六十六部廻国塔

平野家個人墓地



奉納大乘妙典六十六部日本廻国成就之所

〔右側面〕

夫以武陽散人圓心僧久有廻国望于吃當村施主平野氏源左衛門
 為靈嚴光顯法師相續壽園大姉并有縁無縁三界万靈平等
 利益有金錢之助力右之僧戊三月〇廻国日本六拾六ヶ國奉納
 大乘妙典諸国行脚之内諸人他力善根請庚子十月古郷場
 去故供養塔造立者也 敬白

見田方

9. 六十六部廻国塔

浄音寺



享保七壬寅歲 願主 奉供養六十六部日本廻国成就處 九月十六日念誓財給敬白

川崎

10. 六十六部廻国塔

聖徳寺



享保七壬寅天

奉納經日本回国成就供養

九月二十日

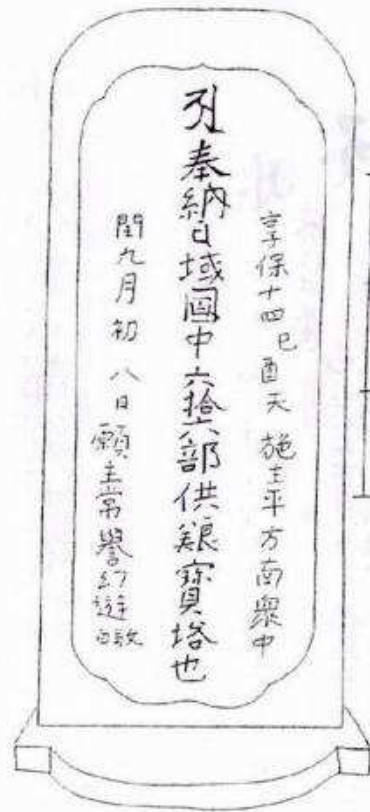
清心比丘

清心比丘

11 平方

六十六部廻国塔

女帝〔女体〕神社



13 長島

六十六部供養塔

長島自治会館



12 大竹

地蔵像付六十六部供養塔

東養寺 (太子堂)



14 増林

六十六部廻国塔

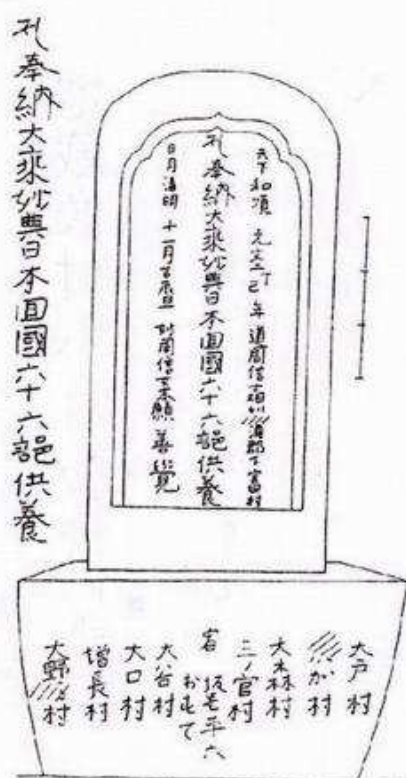
勝林寺



三野宮

15. 六十六部廻国塔

一乘院

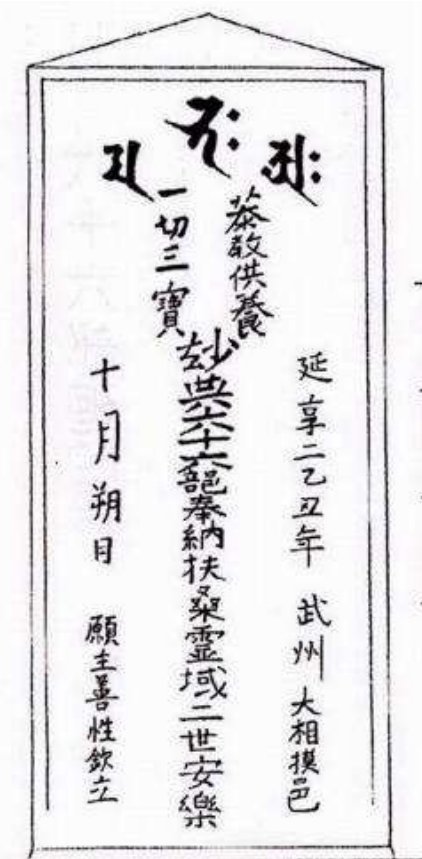


孔奉納大乗妙典百不回国六十六部供養

16. 六十六部廻国塔

東方

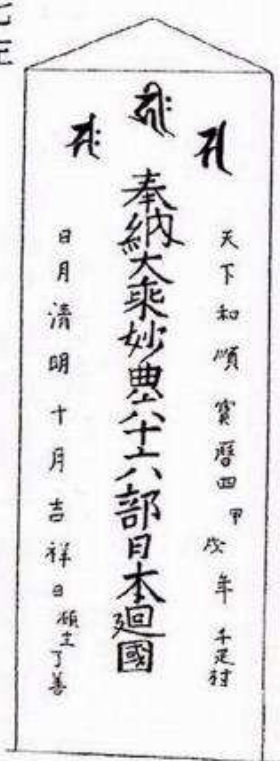
地藏堂墓地



千足

17. 六十六部廻国塔

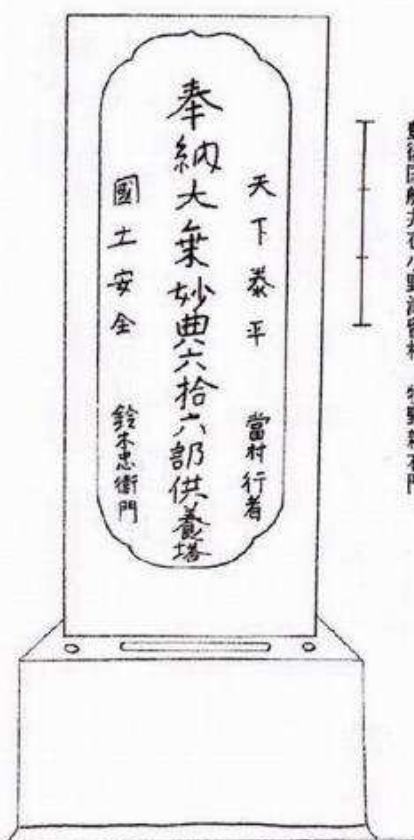
東養寺墓地



七左

18. 六十六部廻国塔

觀照院



〔左側面〕

年宿

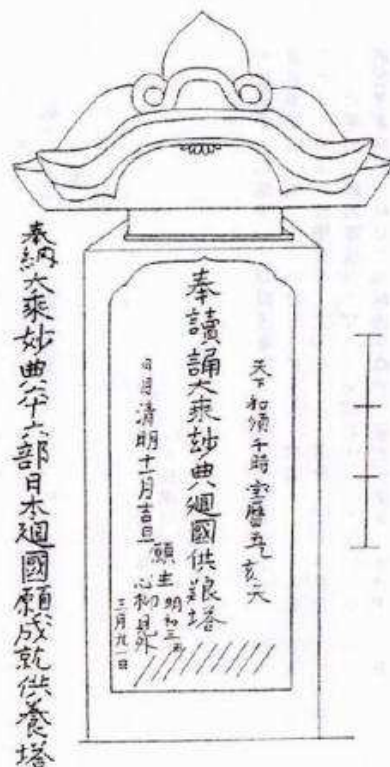
上總國□宮原村
伊勢國渡会郡神野原
讃岐國三野郡下勝間村
豊後國松井在小野津留村

渡□(辺)六郎左門
堀江治右門
石塔与助
牧野新右門

増林

19. 六十六部廻国塔

勝林寺



七左

20. 六十六部供養塔

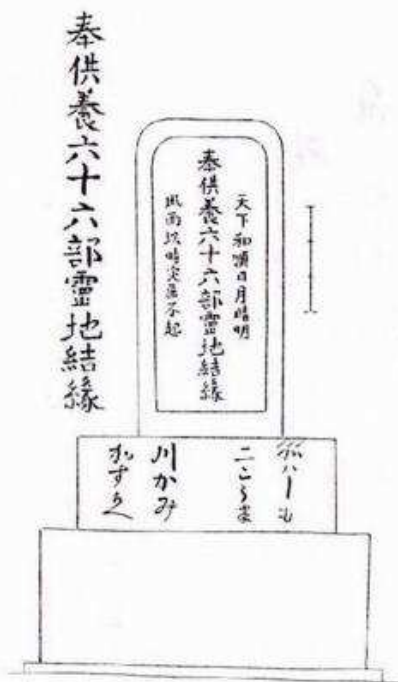
大沼大明神



越ヶ谷

21. 道標付き 六十六部供養塔

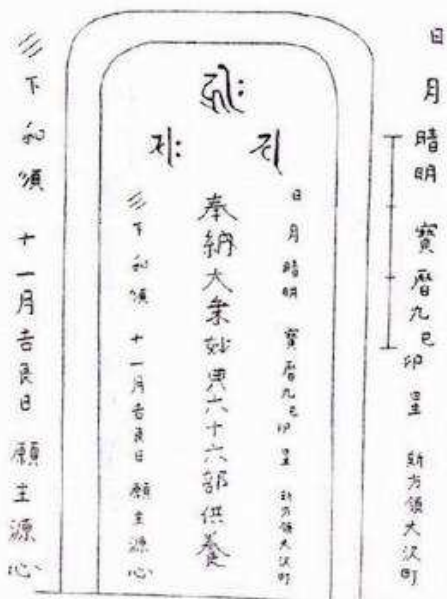
天嶽寺入口



大沢

22. 六十六部供養塔

池蔵樓の地藏堂



小曾川

23 · 六十六部廻国塔



〔左側面〕

おひの身で

廻る日の本

今爰に

如我有祈願

まくうれしき

隨喜施主

助金二分

助力供養

所々善男女等

小曾河村田口源右衛門

田口沢右衛門

所々善男女等

行者 俗名斎藤徳右衛門
法名檀道宗本自題

〔右側面〕

武蔵國埼玉郡越谷庄齋藤徳衛門者産于野崎村而住于小曾河郷人也
當欲奉納經日域六十六州竣已久終不忍止實曆十二壬午暮春出郷廻國〔歴〕
南西北中諸國而順禮神社仏閣四ヶ于茲乃還郷中間伸供養復明和二丙
戌三月趣奥州竊坂東越年丁亥五月掃郷前後六年而納經上畢其間一日
再宿厚恩捨財一鉢助力嗚呼幾乎幸身心堅固所願満足皆是憑於三寶加
護蒙乎衆人慈愛也依之為報恩謝徳彫刻道箇石碑藏置於神社仏閣實印
在々所々寄宿日記信施俗名法名等以為願満供養塔則永劫當不朽如是
宿檀徳本增長善根則汝等々々皆當作佛豈違乎故感心餘不忍措如今稱
檀道宗本初述其意趣云爾

于時明和五星會戊子歲三月下流 野崎山淨山禪寺現住實顯叟誌之

越ヶ谷

24 · 地蔵像付き六十六部供養塔

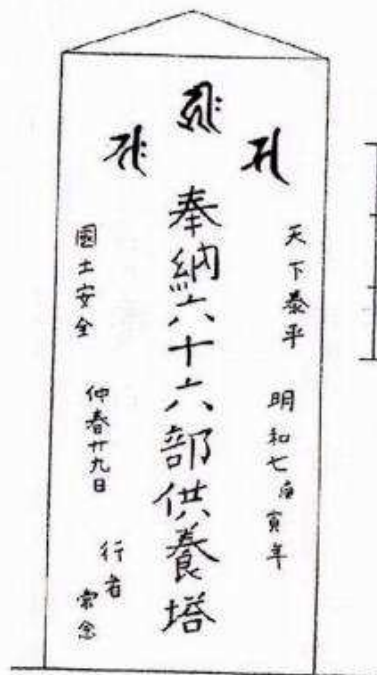


天樹寺入口

千足

25 · 六十六部供養塔

東養寺墓地



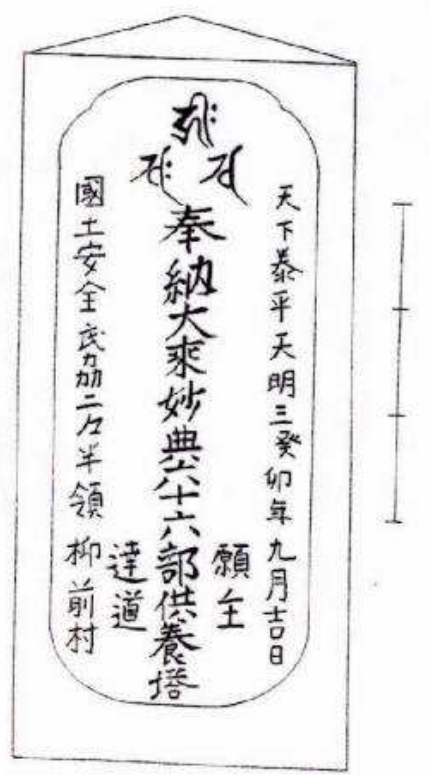
荻島

26. 六地藏像付き六十六部廻国塔 玉泉院



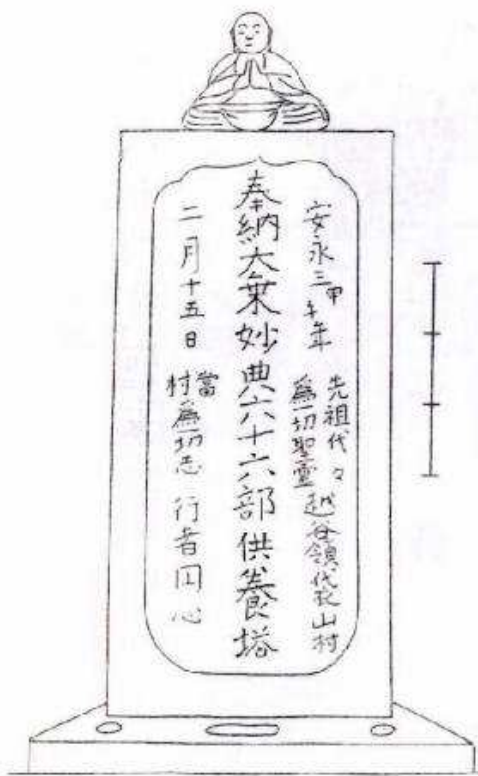
中島

28. 六十六部供養塔 正福寺管轄の共同墓地



袋山

27. 六十六部供養塔 袋山薬師堂



西方

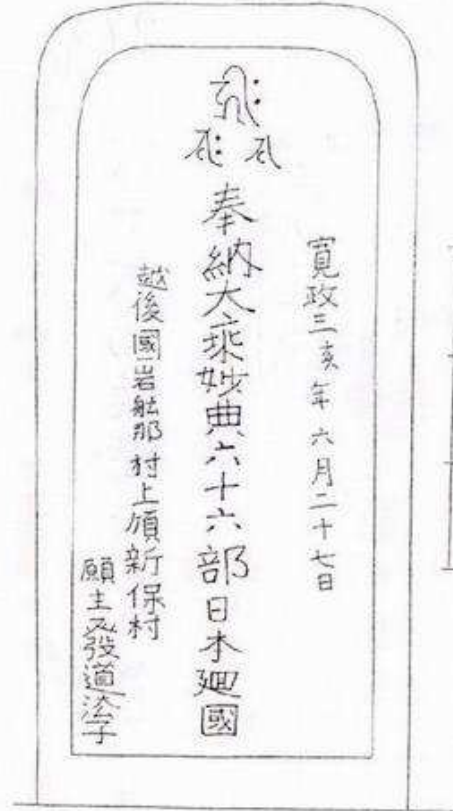
29. 六十六部廻国塔 福寿院



30 大杉

六十六部廻国塔

大杉第2集会所



31 後谷

六十六部廻国塔

根郷自治会館

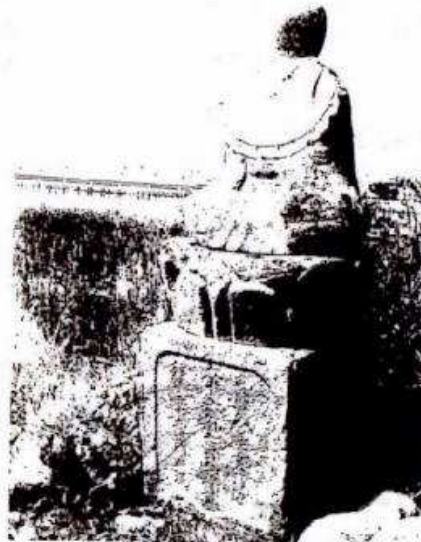
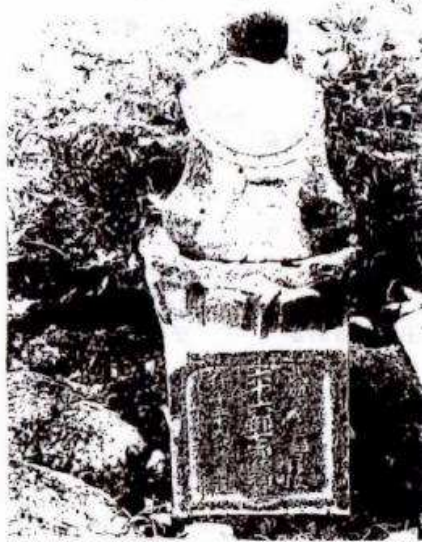


32 越ヶ谷

六十六部廻国塔

天徳寺





【四国の戸板島の「六十六部廻国墓地蔵」】



戸板島
廻国墓地蔵
(一七五三)
寛延四年未天
弘傳心禪定門靈位
六月十四日

武初さま玉郡
新町
六十六部七郎年御墓
行年五十九此所

佐古御戸板嶋村
中村勘六
施主後免町
村上伴五郎
同町
田所安兵衛

(右左十社以)
高祖以

416頁右幅

【越ヶ谷新町の会田七郎兵衛】

六十六部行者七郎兵衛の出た越ヶ谷新町の家

現、大野家

大野新左衛門屋敷	新左衛門
医師龍玄屋敷	井橋 清兵衛
井橋太郎兵衛屋敷	弥兵衛
六郎兵衛件	全田
全田藤右衛門屋敷	八郎兵衛
全田源兵衛屋敷	市兵衛
	三村 権左衛門
全田七郎兵衛屋敷	全田 新右衛門
	庄藏
△ 大戸作右衛門屋敷	大戸 兵藏

日光道中

↓江戸

現、栃木銀行

牛之助屋敷	釘屋 太兵衛
	平兵衛
全田平右衛門屋敷	全田 庄藏
	平三郎
△	清左衛門
△	太郎兵衛
	井橋 宇右衛門
丸屋善三兵衛屋敷	善三 八
	丸屋
△ 嘉右衛門屋敷	庄藏

眞正院
修験
除地
悪水落堀
瓦曾根村
悪水落堀

悪水落堀
越ヶ谷
八条領道中央
瓦曾根
茶屋

福井猷貞著「越ヶ谷瓜の蔓」より作成